

## はじめに

2000年度から科学研究費補助金（基盤研究(A)(2)）による共同研究「東欧・中央ユーラシアの近代とネイション」（代表：林忠行、2000～2003年度、課題番号：12301020）が発足した。

この共同研究は、東欧および中央ユーラシアにおける「近代」と「ネイション」をめぐる歴史と歴史意識を研究対象とする。ここでの「東欧」とはギリシアを含む南東欧、旧ハプスブルク帝国領、旧ロシア帝国西部地域（ポーランド、ウクライナ、バルト地域）などで構成され、また「中央ユーラシア」とは中央アジア、カフカス、ヴォルガ・ウラル地域、南シベリアなどからなる地域とする。これらの地域は、西欧、ロシア、イスラーム世界が接触する多文化・多民族世界で、その大部分の地域は18世紀末から20世紀初頭にかけて（地域によってはソ連時代も含まれる）「帝国」という枠組みの中で、その周辺地域として「近代」をむかえ、それとともに、その地域における「ネイション形成」および「エスノポリティクス」が始まったといえる。

この研究の目的は、当該地域の知識人がいかに「近代」を受容し、その担い手としての「ネイション」を意識したのか、またこの地域でいかに「エスノポリティクス」が発生したのかを、比較検討することにある。さらに、それらの作業と並行して、各地域の史学史を検討し、それぞれの地域における歴史認識、とくに民族史の記述や民族起源論の変遷および現在における歴史認識とナショナリズムの関係なども検討対象としたい。なお、研究題目に含まれている「ネイション」という概念は、何らかの国家性をともなう集団（「国民」）を想起させるが、この研究では、そうしたものに限られず、広くエスニック・マイノリティーを含む集団を研究の対象とすることにする。さらに付け加えれば、「ネイション」、「エスニック・グループ」、「エトニ」といった概念、および日本語での「国民」や「民族」という概念の用法をめぐる問題も、具体的な事例研究と並行しながら、議論の対象となろう。

おそらく、これまで、「東欧」研究者と「中央ユーラシア」研究者が一定期間、継続して共同研究を行うという試みはなかったと思われる。ただし、この二つの地域以外の地域を研究対象とする研究者をプロジェクトから排除することは意図していない。むしろ、この二つの地域を視野の中心に据えることで、両者と隣接する西欧、ロシア、イスラーム世界をつなぐ広い視野での議論ができることを期待している。また、民族史の記述や歴史意識をわれわれが取りあげようとするとき、昨今のわが国における「歴史教科書問題」も無縁の問題ではない。どのような形で接点を見いだすのかは、今後の議論によるが、可能な限り地理的な関心の範囲は広げてみたいと考えている。

この研究はできるだけ多様な学問領域からなる学際的な研究を目指している。上で述べた問題設定の結果として、歴史学が研究の中心を占めることになるが、その場合でも政治史、社会史、文化史などさまざまなアプローチがそこには含まれる。さらに、歴史学の他に、政治学、社会学、民族学など、できるだけ広い専門領域を覆う共同研究としたい。「東

欧]、「中央ユーラシア」、「近代」、「ネイション」といったキーワードでつながることができる多様な研究領域の研究者に「出会いの場」を提供することが、このプロジェクトの最大の目的といえるかもしれない。

そうした最初の「出会いの場」が、このプロジェクトの第1回研究会（2000年11月25～26日、北海道大学スラブ研究センター）であった。この研究会は文部省の新プログラム方式による地域研究「現代イスラーム世界の動態的研究—イスラーム世界理解のための情報システムの構築と情報の蓄積—」の第1班bグループ「国際関係とイスラーム」（代表：酒井啓子・アジア経済研究所研究員）との共催であった。本研究および「国際関係とイスラーム」の両方で分担研究者となっている宇山智彦が第1回研究会の報告と討論の内容について詳しい紹介を行っており、それは上記の「現代イスラーム世界の動態的研究」のインターネット・ホームページをとおして読むことができる（<http://jambo.africa.kyoto-u.ac.jp/~asia/renkan/ias/2000/kenkyukai/001125.htm>）。

この論文集に収録された論文は、上記研究会での報告をもとに執筆されたものである。第1章の「歴史学、民族、中央ユーラシア—今後の研究のための問題提起—」は中央アジアの歴史を専門とする宇山智彦によるもので、「構築主義を中途半端に用いて…、民族の『虚構性』を唱え思考停止する」態度を批判し、中央アジアの例などを引きながら、旧ソ連での民族起源論の特殊性、ロシア帝国での民族間関係の特徴、イスラームと民族の関係などについて述べ、今後の研究のための問題提起を行っている。第2章の「ネイションにおけるメンバーシップと領域」では、比較政治と南東欧政治史を専門とする月村太郎が、政治空間の領域的側面とメンバーシップ的側面に着目し、ネイション建設もこのふたつの次元から検討すべきだとした上で、その議論の旧ユーゴでの適用可能性を論じている。

第1回研究会では、宇山報告、月村報告とともに、歴史学の小沢弘明が「方法としての民族・国民—歴史学の現状と展望」という報告を行い、「国民」「民族」「地域」は実体ではなく、国民国家体系、国民社会、歴史的地域などにまつわる問題を索出する「方法」であるという主張を行い、また、佐原徹哉が「19世紀のバルカン都市におけるネイション、エトニ、エスニシティ」という報告で、nation、ethnie、ethnicity、ethnic group、communityなどの諸概念を整理し、1860～70年代バルカンの都市の事例から、「コミュニティが主体的にネイションとの関係を選択する」という指摘をおこなったが、残念ながら、この二つの報告を本報告集に収録することはできなかった。宇山、月村、小沢、佐原の4報告はともに多くの点で問題認識を共有しつつも、「構築主義」の捉え方、諸分析概念の理解等で相違も見られた。このあたりの問題は、今後も継続して議論の対象となろう。

第3章はスラブ口承文芸研究の碩学、栗原成郎による「ボスニア・ムスリム民衆叙事詩の成立とムスリム民族意識の形成」で、ボスニアとセルビアの叙事詩に関する19世紀の文献の検討をとおして、セルビアでは1389年の「コソヴォの戦い」が集団意識の上で強い力を持ったことが紹介されている。第4章「中央ユーラシアの叙事詩に謡われる『ノガイ』について」で、坂井弘紀は、中央ユーラシアの叙事詩「ノガイ体系」の分析によって、そ

ここで謳われた英雄と「民族形成」の関係を論じている。ベテランと若手による二つの研究は、叙事詩研究と歴史研究との接合という興味深い視点を提示している。

第5章「政治的集団行動の社会範疇とその解釈について—1998年ブリヤーチア国会議員選の分析—」で、社会人類学の渡邊日日は「全的共同体」の存在を前提とする研究を批判する立場から、ブリヤート共和国での1998年国会選挙の微視的観察をとおして、「氏族」による投票行動の差が曖昧なものであるという指摘をおこなっている。この研究は、人類学と政治学を架橋する試みといえる。第6章「民族をめぐる実践—ブルガリアにおけるポマクの事例から—」で文化人類学の松前もゆるは、ブルガリア系言語を使用するムスリムである「ポマク」を取りあげ、その自己認識と、「ポマク」に対する他者認識を国勢調査や住民登録などをとおして歴史的に分析した。この共同研究では、このような実証的事例研究を総合的な議論の対象とする試みも継続したい。

本報告書は、昨年度中の刊行を目指していたが、編者の不手際によって実際の刊行は予定よりもかなり遅れてしまった。昨年11月の研究会直後に、原稿をお送りいただいた著者にはお詫び申し上げます。また、最後になってしまったが、昨年11月の研究会で研究グループの外から討論者としてご参加いただき、貴重なコメントをいただいた大塚和夫、伊東一郎両氏にこの場を借りて、お礼を申し上げます。

2001年5月

研究代表 林 忠行

#### 研究組織

- 研究代表者 林 忠行（北海道大学スラブ研究センター・教授）  
研究分担者 家田 修（北海道大学スラブ研究センター・教授）  
研究分担者 宇山智彦（北海道大学スラブ研究センター・助教授）  
研究分担者 北川誠一（東北大学大学院国際文化研究科・教授）  
研究分担者 佐原徹哉（東京都立大学人文学部・助手）  
研究分担者 篠原 琢（東京外国語大学外国語学部・講師）  
研究分担者 松里公孝（北海道大学スラブ研究センター・教授）